

# おumi漁具図鑑

44 ハリカゴ

## 総延長1キロ超延縄収め

ただの籠のようにみえるが、これはある漁具を収納したときの状態である。よく見ると籠の口縁部にはびっしりと鉤がささっている。多数の鉤を長い縄につけてウナギなどを狙う延縄漁の道具なのだ。文字どおりの一筋縄ではいかないらしい。沖島（近江八幡市）で、現在も漁を続けている久田忍さん（81）に話を聞いた。

籠に収まっているのは、長い「ミチナワ」に鉤をつけた「エダイト」をたらししたもの。忍さんの場合、鉤の数は約200本、エダイトの間隔は7センチほどで、

縄の総延長は1キロ以上にもなる。

ハリカゴ漁の旬は、夏。水温が下がるとウナギは冬眠するのので、漁期は5月から11月ころまでである。春は水深4〜5メートル、夏以降は10メートル前後と、季節によって魚のすみ場所が変わる。漁師は培ってきた経験をたよりに仕掛けるポイントを選ぶ。

餌には生きたテナガエビを使う。船をバックで走らせながら1本1本の鉤にエビをつけて「はえて」（仕掛けて）いく。ウナギは死んだ餌には食いつかないため、内臓を避けて尻尾の

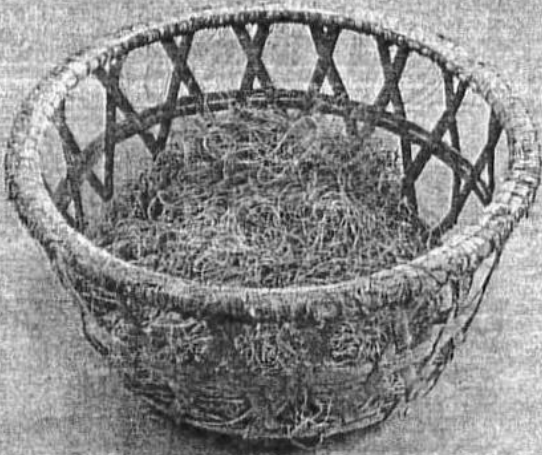
さきから慎重に鉤をさす。仕掛けるだけで2時間はかかる。

仕掛けの回収は、あくまで午前4時ころ。延縄を引きあげ、鉤に掛かった獲物がみえてくるとタモ（網）ですくいあげる。大物のウナギは暴れるとエダイトを切ってしまうほど力が強く、タモですくうのも容易ではないが、あたりが暗いうちは暴れ方もそれほど激しくないといい。夜明けまえに船を走らせるのは、この時間帯を狙う意味もある。

掛かったウナギはたいい鉤を飲んでるので、口元でエダイトを切って生け簀へ。引きあげた延縄は、鉤がきちんと順番に並ぶように口縁部にさしながらか籠に収める。いいかげんに鉤をさすと、糸がからまって次の漁ができない。「難しいで、ほんまに難しい」と忍さんは語る。ベテランの漁師でも油断できないこの作業が、日々の漁には欠かせないのだ。

直径50センチほどの決して大きくはない籠に、1キロにもなる長い延縄が整然と収納されている。漁師の手先の器用さに驚くことも、ひとつの漁がいかに多くの工夫のうえに成り立っているかを実感させられる。

ハリカゴ（口径52.0センチ、高さ28.0センチ）



琵琶湖博物館嘱託職員 三柳友梨香  
隔週木曜掲載です